縮小社会研究会　第 83 回研究会

日時：2024 年 10 月 10 日（木）　19：00 ～ 21：00、　オンライン開催（zoom）

人類の経済活動は、地球の限界（プラネタリーバウンダリー）を大きく超えています。このまま、資本主義での経済成長を続けて地球が再生できないほど壊してしまうか、それとも、地球の限界の範囲内に経済活動を縮小して資本主義ではない別の仕組みに移行するか、大きな転換点にあります。フランスで 2010 年代後半に提案された「崩壊学」はフランスで大きな反響を呼びました。「崩壊学」によると、資本主義の次の世界のヒントになるのは、大都市ではなく、東ヨーロッパや南ヨーロッパ、ラテンアメリカの一部の辺境域で資本主義の影響が希薄な地域であるとしています。講師の吉田太郎さんに紐解いてもらいます。

資本主義の次に来るのはどんな世界か
ー「脱成長」と「崩壊学」をヒントにー

講師：吉田太郎さん（農業ジャーナリスト・日本有機農業研究会月刊誌「土と健康」編集委員長）

講演要旨：コロナ禍や気候変動・生物多様性の喪失からグローバル化のゆきづまりが人口に膾炙されるようになっている。演者はソ連の崩壊と米国による封鎖から脱石油・鎖国を経験したキューバの農業に着目したことから、25 年以上も脱成長に関心をいだき、崩壊論や脱石油の未来についての論説も読んできた。「崩壊論」ではジャレド・ダイアモンドが有名だが、ジョセフ・ティンター、マイケル・グリア等のそれ以外の識者の見解を紹介する。

2010 年代後半に提案された「崩壊学」がフランスで大きな反響を呼んだ背景には、もはや文明崩壊を防ぐ術がなく、文明が崩壊した以降の世界におけるローカルなサバイバル・シナリオが構想されていることがある。しかし、負の未来像はノーシーボ効果しか生まない。人類の本性が善であるとのルトガー・ブレグマンの最新の脳神経科学や心理学の知見も紹介しつつ、ネーション・ステーツとしての崩壊は避けられないとしても、ローカルとしての食と農を基軸とした豊かな脱成長社会の可能性を筆者が見分してきたスイスやキューバの農政の事例も織り込みながら紹介したい。個人としてのシンプルリビング(事例多くあり)と総論としての日本の危機論(著書多数あり)の中間としてローカルなガバナンス(自治・自律)のあり方を皆さんと議論したい。

吉田太郎さんの略歴：　筑波大学自然学類卒。同大学院地球科学研究科中退。埼玉県、東京都、長野県の農業行政職員を経て、定年退職後はフリーランスのライターとして講演・執筆活動を行っている。最近著に「土が変わるとお腹もかわる」(2022)築地書館、「シン・オーガニック」(2024)農文協がある。
https://www.tsukiji-shokan.co.jp/mokuroku/ISBN978-4-8067-1631-0.html

zoom の URL：https://us02web.zoom.us/j/81722839073?pwd=dONc1KKZOhGQHGO6ZvUbmxmo6naRH6.1
パスコード：643031、　ミーティング ID：817 2283 9073

参加登録：会員は不要。非会員の方は松久（h.matsuhisa@shukusho.org）まで連絡願います。

参加費：会員は無料、非会員は 500 円

一般社団法人 縮小社会研究会　e-mail: jimukyoku@shukusho.org　HP: http://shukusho.org/